

わが人生観 I 岡 潔

1968年11月30日 初版発行

定価 450 円

著 者 岡 潔

発行者 大和岩雄

発行所 ^{だい わ}大和書房

東京都文京区関口 1 の33

振替 東京 6 4 2 2 7

電話 (203) 4 5 1 1 ~ 4

郵便番号 112

製版・印刷・日放印刷 製本・美成社

落丁本・乱丁本はお取替えます <検印略> ©1968

わが人生観¹

岡 潔



大和書房



自宅の庭にて 昭和43年6月

師道

岡潔

人の判断には幾種類あるだろう。

一番簡単なのは機械的判断である。これは

たとえば今交通信号は緑か赤かと、まうまう

なものである。これは知覚さえあれば出来る

。機械的判断には記憶を使う場合もある。す

べて機械的判断は勘頭算をするのである。

次に前頭葉をする判断に二種類ある。一つは

悪いが悪くないかの判断であつて、これは知

りがいる。二つとき、傷く知力が理性であつて

目次

私の人生観

私の人生観

無明

無差別智

宗教について

春宵十話

人の情緒と教育

情緒が頭をつくる

数学の思い出

数学への踏み切り

フランス留学と親友

発見の鋭い喜び

宗教と数学

学を楽しむ

68 64 59 54 50 45 41 37 31 28 17 13

目 次

情操と智力の光	72
自然に従う	76
ところといのち	
ところ(一)	83
ところ(二)	86
天と地	93
いのち(一)	97
いのち(二)	111
自己と情緒	
自己	125
自分とは何か	141
日本の情緒	162
日本人と直観	175
情緒について	182

片雲の思想

環境 213

有情 215

自己 217

民主主義 219

欲情 221

自由意志 223

関心 225

創造 227

再び自己について 229

生命観 231

愛国 233

日本の現状 235

『純粹日本人』を前にして

松永伍一 239

装幀

上口陸人

わが人生観₁

心といのち

私の人生観

私の人生観

私のいま持っている人生観は、私が選んで採用したものではなく、自然にそうさせられて、そうならざるをえなくなつて生まれたものなのです。そのいきさつを申しましょう。

私は純粹に日本人です。純粹に日本人とはどういうことかという、私は、民族はそれぞれ心の色どりを持つていると思います。日本民族は、日本民族の色どりというものを持つている。この色どりもいづれ変わつてはいきます。しかし、實際はなかなか変わらないものであつて、変わったとみえるようになるまでには、十万年ぐらひはかかるだらうと思つています。その民族の色どりと、その人の心の色どりとが一致する人を、私は純粹な日本人といつてゐるわけです。したがつて、国籍はかりに日本になくてもかまわない。ここではまず、私が純粹に日本人であつたといふことを考慮にいらていただきたい。もっとも、純粹な日本人という自覺を得られたのは、一九三二年（昭和七年）フランスから帰国して、芭蕉や道元どうげんぜんじ禪師をよく調べ、知つてからです。芭蕉

(一六四四—一九四年)を調べて一応の自覚を得、道元禪師(一二〇〇—一五三年)を調べてこれに墨をいれるといったふうにして、〃純粹な日本人〃の自覚はあとで得たのです。

一九二九年から丸三年パリにいた私は、帰国前の一九三一年(昭和六年)、満州事變の勃発を海外ででき、數カ月というものは諸外国の日本に対するごうごうたる非難をいちいち身に浴びたわけです。いわば屋外で暴風雨に会ったようなもので、そのとき屋内にいた人たち、つまり日本の国内にいた人たちには想像もつかぬ激しいものでした。いろいろ尋ねられるから答えようとするが、事情はさっぱりわからない。そこで日本料理屋なんかに行って日本からきた新聞を見る。ところが、見出しにはもっともらしい理由が大きいのっているので、大喜びでそれを読んでみると、中味は全然そうではない。羊頭狗肉やぎうけんじくとはこのことで、いくら内容を読んでも理由らしい理由は見当たらない。

レストラン兼食堂のような所で食事をしていると、入ってくる外国人がいちいち「お前たち日本人はなぜこういうことをするのか。それともなにか理由があるのならいってみろ」というので、理由がほしかったのですが、なにしろないからこの方は答えられない。「私にも事情はわからないが、あなた方のいう通りどうも日本が悪いようだ」。精いっぱいそれくらいしか答えられない。しかし私にしてみれば、日本がどういうことをしているかの見当はついていたので、そういうことをして平気でいる日本の国のことが心配になった。

当時はまだ「純粹な日本人」という自覚はしていませんが、内心目覚めかかったときにその心配を植えつけられたのだから、相当の関心を日本のうえに集めたことは想像できると思います。そののち日本へ帰って国内のありさまを目のあたりに見、またそののちもずっと国内にいて日本の歩き方を見ています。

どういう歩き方かとひと口にいうと、日本は危険な方から危険な方へとだんだん歩き続け、その歩みを止めない。それは今日もお続けているのです。安心な方へでも歩き始めるか、そうまでしないまでも座り込んで歩かずにいてくれたら、こんなに長く重くなった肩の荷物は一度おろすのですが、だんだん心配な方へ歩かれたのではどうにも関心の放し方がない。こうして帰国後三十四年というものは、日本のうえに関心を持ち続けてしまったのです。

私はいま日本にいますので、日本のいろいろな心配ごとの方が自分の周辺よりもほど心配になります。これは人生観ではありませんが、むしろ人生観以上のものだと思います。あとは日本が心配な状態をどうすれば取り除けるかということになってしまふ。好きも嫌いありません。わらにでもすがりたいというだけです。

そこで私が見るに、この先日本が立ち直るのに、じゅうぶん百年はかかります。それから国内を整備するのにもう百年、残る百年で生物の絶滅を救わなければならない。ところがあと三百年、生物が絶滅せずにどうにか持ちこたえてくれるかどうか、この方もキリスト教徒に呼びかけ